

2022年9月11日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「主の御前に祈る」

聖書：士師記11:1～11

後に士師と呼ばれるエフタが登場する。彼は「勇者であった。彼は遊女の子で」と記す。聖書は世間体とか生い立ちとか、そういうもので神が用いる、用いないということではない。遊女の子であろうが、正妻の子であろうが神がお選びになるのは、神と私との関係の中で起こる。

父ギレアドは、正妻にも子が与えられ次男、三男ともうける。その息子たちが大人になり、兄であるエフタに対して、「あなたは、よその女の産んだ子だから、わたしたちの父の家にはあなたが受け継ぐものはない」(士師 11:2)と、兄エフタを追い出した。これは財産問題。父親の財産をより多く分け前を頂くために一人を追い出したということ。

しかし、このエフタはたくましい。家を追い出されてトブの地に身を落ち着かせたとある。そして「ならず者と行動を共にするようになった」(士師 11:3)とある。エフタは、知恵があり、人望が厚く、腕っぷしも強かったという感じのようだ。

エフタは再び生まれ故郷に戻ることになる。ギレアドの全住民の頭となるよう懇願された。追い出された者が、再び追い出した者から戻ってきて欲しいとのことだが…。何か自分たちの都合で、エフタを利用してはいないかと疑念を持つだろうが…。しかしエフタはしっかりと、主なる神と自分との関係を確認しながら、決断しているのである。

11 節「…エフタは、ミツパで主の御前に出て自分が言った言葉をことごとく繰り返した」とあるが、それは何度も何度も、主の御前に出て祈ったということである。「神様、私がですか、私なのですか、私を用いてくださるのですか」と、何度も繰り返して神に祈ったのである。

神の御声は聞こえてこない。しかしエフタは、祈りつつ、決断し、前に出て歩み出していくのである。

旧約聖書の話には、しばしばこのような戦い、戦を背景にした物語があつて、あたかも戦争が肯定されるかのような場合があるが、聖書の読み方として、このような場面でも常にイエス・キリストの宣教を通して見る必要があり、全ての戦争は否定され、人を愛すること、平和をつくり出すことを見逃してはいけない。

今朝の士師記においては、どのような人、どここの生まれであつても、神は私と、神はあなたと、向き合う方であり、祝福される方であり、神のみ前に祈るあなたの声を聴いてくださるお方であることを、このエフタの歩みから学びたい。(神谷)